立ち読み版

修羅場だと思っていたら姉妹丼だった件

《筆祭競介 挿絵：わつきるみ》

序　章　妹に告白したら、初恋の姉が現れた件　006
第一章　抜け駆けセクシーお姉ちゃん　022
第二章　妹のお尻でイッた後、お姉ちゃんと初体験　077
第三章　お淑やかな妹の寝取り宣言　133
第四章　ヤキモチ姉妹のご奉仕Wフェラ　182
第五章　修羅場だと思っていたら姉妹丼だった件　209
終　章　姉妹丼だと思っていたら、やっぱり修羅場だった件　252

登場人物紹介

Characters

朝比奈清香（あさひなさやか）

澪の妹で、お淑やかで清楚な女の子。澪が転校してくるまでは学園の男子たちの人気を一身に集めていた。密かに祥吾に想いを秘めていたのだが……!?

朝比奈澪（あさひなみお）

アメリカに留学していた、清香の姉。進学を機に日本に帰国してきた。とんでもない美少女で、学園内の男子たちからの人気は、ファンクラブが結成されるほど。

桐山祥吾（きりやましょうご）

徳重学園に通う男子生徒。清香と澪の姉妹とは幼馴染みで、清香に片想いをしているのだが、初恋の相手である澪のことも気になって……!?

このままだと完全に一線を越えてしまうという理性的な意識と、初恋の人と初体験ができるという男にとってこれ以上ない喜びで――自分の本心がシタいのかシタくないのかすらわからなくなっていた。

対して澪は左手を布団につき前屈みになって、キスができそうなほどの至近距離からこちらの顔を覗き込んでくる。

「ショー坊の全部が欲しいの♥」

彼女は右手で男根を掴みつつ、その声はこちらとは対照的に囁くように小さかった。

「好きだよ、ショー坊♥」

「ッッ～～っっ⁉」

改めてそう告白してきた澪の瞳は、自分に対する想いで感極まったように潤んでいる。

これほどストレートに自分を求められて、それでも阻止できるほど祥吾は理性的でも大人でもなかった。そしてこの告白の瞬間、軽いパニック状態でよく把握できなかった自分の気持ちが『ミー姉ちゃんとエッチがしたい！』一色に染め抜かれる。

「僕もだよミー姉ちゃん！」

気づいた時には本心から、彼女の言葉に答えていた。

その瞬間、たっぷりと潤んでいた澪の瞳が糸のように細くなり、目尻に大きな涙の珠が結ばれる。

そして――ちゅぷり♥

「……ッくぅ」「はぁン♥」

澪に握られていた男根が、彼女の入り口に接触した。

（あ、当たっちゃってる……今、ミー姉ちゃんのアソコに……僕のが……）

肉先ではっきりと、クニュクニュとした牝襞の柔らかさを感じる。

加えて、男根自体が先ほどのフェラで唾液まみれになっているにもかかわらず、彼女自身も濡れていることがはっきりわかる。

（ほ、本当にしちゃうんだ……あの……ミー姉ちゃんと……）

物心ついてから小学校の高学年になるまでの、主要な記憶は全て彼女とのものだった。

優しくて、面白くって、強くて、突拍子もないことばかりする一つ年上のお姉さん。

彼女と一緒にいることがこの世の何よりも楽しくて、いつしか澪を見るたびに、胸がトクトクと早く打つようになっていた――初恋の相手である。

もし澪がアメリカに留学していなければ、今でも彼女のことをずっと想い続けていたかもしれない。ひょっとすると自分が清香に惚れたのは――澪の妹である彼女の中に、初恋のトキメキを見ていたのかもしれない。

そんな相手と今、結ばれようとしている。

「あのちっちゃくて可愛かったショー坊と、初めてをしちゃうんだと思うと……なんだか

胸の奥がキュンってしちゃう♥」

うっとりと目を細める澪も、自分と同様の想いを噛み締めているようだ。眉間に軽く皺を寄せながら、桃色に染まった頬をプルプルと感極まったように震わせている。

そんな官能的すぎる相手の表情に、胸の奥がドキンと弾んだその直後――ヌぷっ♥

「ああっ!?」「は、入って……きたぁ♥」

祥吾の亀頭が彼女の中にめり込んだ。

(す、凄くキツくて……なのに内側がヌルヌルしてて……めちゃくちゃ気持ちいい!)

先ほどのフェラで限界まで追い詰められていただけに、これだけでイッてしまいそうだ。

祥吾は反射的に奥歯をキツく噛み締めて、暴発しそうな大波をなんとか耐える。

「あぁぁ……もの凄く熱くて、硬くって……あぁッ、シ、ショー坊がアタシの中に、食い込んできて――ッぁ!? ンはぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

ゆっくりと腰を下ろし二人の初結合を慎重に進めていた澪が、いきなり全身をビクンと震わせて、まるで腰でも抜かしたように一気にズルンと祥吾の全てを受け入れた。

「っくふぁぁぁ!? ええっ!? なんで急にッッ!?」

あまりの唐突さに驚いて、視線を上の澪に向ける。すると、先ほどまで前屈みだった幼馴染みは、胸を反らすような体勢で全身を小刻みにビクつかせていた。

「……あっ!?」

その美貌に浮かんでいる、痛みに耐えているような強張りを見てハッとする。
慌てて二人の結合部に視線を向けると、彼女が今まで本当に処女だった証が、紅の筋となって流れ落ちていた。
「だ、だだだだ大丈夫⁉」
慌てて尋ねる少年に対し、年上の幼馴染みは強張っていた表情をゆっくりと戻しながら、片目を薄くソッと開ける。
「最初は身体が引き裂かれるみたいにビリッてして、もの凄く痛かったけど……でも今は……そうでもないかも……」
「……む、無理してない？」
心配顔の祥吾に対し、澪はもういつも通り悪戯っぽい表情になり、こちらの胸をツンと突いてくる。
「ショー坊のクセに生意気だぞ♥」
その表情にも声色にも、痛みを無理して我慢しているような雰囲気はほとんどなかった。
どうやら本当に大丈夫そうだ。
（そ、それにしても……ッくあぁぁ……す、凄いよ、ミー姉ちゃんの中……）
破瓜の流血に伴う女体への心配が去ると、改めて初セックスの快感に意識が向かう。
澪の中はとても暖かく、蜜液に濡れたしなやかな膣襞たちに万遍なくペニスを絞られて

いて、まさに初体験の肉悦だった。
「そ、それじゃあ……動き始めるよ？」
「は、初めてなんだから……ゆっくりと、ね」
「うん♥」
澪はこちらの腰にぺったりと密着させていた下半身を、ゆっくりと持ち上げ始めた。
『つくふあぁあぁぁぁあぁ♥』
同時に二人の口から、愉悦の声が盛大に溢れ出る。
「ほ、本当に大丈夫みたいだね」
「うん。すっごく気持ちいいよお」
彼女は恍惚とした顔をして、
——クチュ、ヘコヘコ、ヌプぬちゅッン。くちゅズンッ。グチュくちゅヌチュン。
と徐々に腰をリズミカルに上下させてゆく。
（こ、これがセックスなんだ！　凄いよコレえぇぇぇ！）
まるで無数の舌に男根全面を舐めまわされているような快感である。
そして少年を追い詰めるのは、ペニスにもたらされるその直接的な肉悦だけではない。
初恋相手の女性と身体を繋げているという実感が、男としての精神的な部分も強烈に満足させてくれる。

「ああっ、イイ。凄いよ、コレぇ。ショー坊のオチンチン凄すぎだよぉぉ」
澪が腰を上げる際、自ら腰を前に『クイッ。クイッ』とキレよく突き出すような動きをし始める。
膣のヘソ側部分に、よほど気持ちいいポイントがあるのだろう。彼女の喘ぎ声が甲高くなっていくに従って、徐々にその方向へ動かす範囲が大きくなっていく。
（うわー！　なんか今までのミー姉ちゃんと全然違う！）
これまでの澪は、祥吾を気持ちよくさせて虜にする。独り占めする。清香から寝取る。という目的で一貫していた。そのため、もともと肝が据わっていることもあり、どんなエッチな行為でも常に祥吾をリードしていた。
しかし今、澪は自身の快感に溺れている。
「そんなにいいの！　そんなに僕のが気持ちいいの！」
祥吾が思わずそう叫んだら、それまで恍惚としていた澪がハッとして、その美貌が一気に真っ赤に染め上がる。
それは純粋な恥じらいの色で、パイパンを見られた時の比ではない。
「だ、だめぇ！　見ちゃダメぇぇ！」
しかしそう絶叫しながらも、腰の動きは止められないようだ。むしろますます激しくなり、上下というより前後の動きに近くなっている。そのため中のペニスは、きつく膣襞に

吸いつかれながらより鋭く扱かれて、さらに強烈な快感に襲われ続けている。
「だ、だから見ちゃダメって言ってるのにぃ！　な、何よその顔ッ！　コラ、ショー坊！　お姉ちゃん、本当に怒っちゃうぞぉ！」
耳の先まで真っ赤にしながらそんなことを叫んでいるのに、なお腰は激しく振られ続けている。
彼女はそんな己の本能的な姿を見られるのが、たまらなく恥ずかしいようだ。
（可愛い！　それにエロい！　あんなに真っ赤になってるのに、それでも腰の動きが止められないミー姉ちゃん、エロ可愛すぎるッ！）
形のいい眉が悩ましげな八の字になり、セクシーな唇を0の形にして「ダメ」と言いつつあられもなく喘いでいる。しかも彼女がカクカクと激しく腰を振る動きに合わせて、いまだに紫色のブラジャーに包まれたままの巨乳がダイナミックに上下に揺れていた。
ペニスから送られてくる快感だけでなく、視覚や聴覚から雪崩（なだ）れ込んでくる澪の艶姿もたまらない。
「嫌だよそんなの！　今までミー姉ちゃんが僕の恥ずかしい姿を見てたみたいに、今度は僕がミー姉ちゃんのエッチな姿、ばっちり見ててあげるから！」
責め気など全く持ちあわせていない祥吾ですら、思わずそう叫んでいた。
「ッッッ⁉」

その瞬間、澪の瞳がさらに潤み、目尻が下がり、眉根が震え、その美貌にいくつもの感情が交錯する。

恥じらい。驚き。そして快感。

そんな様々な彩の中で、祥吾が初めて目にするこの表情は――ひょっとして、好きな牡に屈する喜びか？

幼い頃から常に彼女が漂わせていた自分をリードするような雰囲気が掻き消えて、今の彼女は完全に牝の顔だった。

二人の精神的な立場が、完全に逆転した瞬間かもしれない。

「ねえ⁉　どうなの、ミー姉ちゃん！」

そんな相手に重ねて返事を要求した。

それは祥吾にとっても画期的なことである。

すると澪の目尻がさらに下がり、恥ずかしさで真っ赤になっていたその美貌がトロンと蕩けた。それは明らかに、何かに屈服した表情で、彼女はすぐにその瞳をギュッとつぶり、長い髪を振り乱すようにして絶叫する。

「凄いの！　本当に凄いの！　ショー坊のオチンチン、アタシのアソコにぴったりなのッ！　長さも太さもちょうどいいのッ！　だから腰の動きを止められないのぉぉ！」

こんなにも感情を剥き出しにして叫ぶ澪を見るのは、初めてかもしれない。

自分があの澪をこれほどヨガらせていると思うと、今まで以上に凄まじい精神的な満足感が脳天にまで突き抜けてくる。

しかも――ぐちゅズン！　ぬちゅズン！　くちゅズンッぬちゅズンズン！

腰の動きがさらに本能的となり、ヘソの裏側だけでなく、自身自身の一番奥にまで祥吾の先端を叩きつけ始めた。

（っあぁぁ！　響いてくる！　ミー姉ちゃんの一番奥が、オチンチンの先っぽに何度も当たって響いてくるううぅ！）

おそらく子宮の入り口だろう。澪が鋭く腰を振り下ろすたびに、男根の先端がグプグプとそこに嵌まり込んで、目の前が白く瞬くほどの肉悦が迸る。そして――。

「気持ちよすぎるの！　さっきから気持ちよすぎて、頭の中が、何度も真っ白になってるの！　頭の中に何度も打ち上げ花火が上がってるみたいでッ、ショー坊の先っぽがアタシの一番奥に食い込むたびにぃ、ぎぼぢよすぎでぇッ――あぁーーーーーーッッッッ！」

瞳に官能の涙をたっぷりと滲ませ、唇からはだらしなく涎を垂れ流し、喘ぐ言葉の呂律すら怪しくなってきている。その姿に、幼い頃たった一つ年上なだけなのに、この世の誰よりも頼もしく見えたあの『ミー姉ちゃん』の面影は欠片もない。

そして彼女をそんな風に変えたのは――他の誰でもなくこの自分なのだ。

「ああぁぁぁぁぁぁぁ！　ミー姉ちゃぁぁぁぁぁぁん！」

年上の初恋相手が『自分の女』になったという強烈な実感が、牡の本能に火を点ける。

――ズン！　ずちゅズズン！　ズパパパパン！

布団の上でずっと横になりっぱなしだった祥吾の腰が勝手に上へと突き上がる。

それに伴い、ブラに包まれている澪の巨乳が彼女の顎につきそうなほど上に弾み、動きが小刻みになるに従ってブラの中で細波（さざなみ）を打つようにタプタプ揺れ出す。

蜜壺を貫く男根も無数の膣襞と擦れあい、肉先が牝の最深部に何度もブチ当たり、脳味噌の皺の奥まで痺れるような快感が迸る。

「らめええええぇ！　なにごれえぇ⁉　きぼぢいい！　ああッ！　アタシぃどうなっちゃうのぉぉぉ！　こんなにぎぼぢいいのはじめてらよおおぉぉ！」

澪が甲高く叫ぶたびに、セクシーな女体が薄い腹筋を中心に、ビクビクッと鋭く痙攣した。そして明らかに彼女の意志とは関係ないタイミングで、ペニスを包む膣襞たちもそれに合わせて収縮する。

そのたびに祥吾はイキそうになってしまい、奥歯を強く噛み締めた。

（ん？　初めて？　って、まさかミー姉ちゃんッッ⁉）

これがセックス初体験の自分には、女性の絶頂がどういうものか正確にはわからない。

しかし射精と違い、具体的な区切りがないことは知識として知っている。また、男と違い、連続で何度もイケるとも聞いたことがある。

「ひょっとしてイッてるの⁉　ミー姉ちゃん、僕のオチンチンで、さっきから連続してイキまくってるの⁉」
祥吾が腰を突き上げながら尋ねると、両目をつぶり細い顎をガクガクと揺らしていた幼馴染みが、涙目でこちらを見詰めてきた。
「イク？　これがイクってことなの？」
「えっ⁉　ミー姉ちゃん、これまでイッたことないの？」
「そ、そんな恥ずかしいこと、女の子にきかないのおおぉおぉ！」
彼女はそう叫びながら、再び自ら腰を躍らせ始めた。
――グチュ、ズン！　くちゅン！　ずちゅぐちゅグジュン！
がっちりと嵌まりあった牡牝の性器が、愛液を撒き散らしながら混じりあう。
自分の動きと相手の動きの相乗効果で、さらに深く肉先が彼女の中を抉り、竿肌たちが様々な角度で膣襞を擦る。今まで以上の肉悦が立て続けに迸ってきて、ずっと耐えていた官能の昂りが、もう我慢できなくなってくる。
「あああぁぁぁ！　もうイッちゃうよぉぉ！　僕のオチンチンでイキまくっているミー姉ちゃんで、僕ももうイッちゃうううぅ！」
祥吾が限界を叫んだ瞬間、髪を振り乱すようにして喘いでいた澪がすぐにこちらを見詰めてきた。

「うわわわっ!?　ご、ごめん！」
無論、祥吾はすぐに動きを止めて相手を窺った。
「あ、あの……だ、大丈夫です。そ、そんなに痛くはありません」
「でも、そんなに、ってことはやっぱり少し痛いは痛いんだよね？」
「……は、はい。で、でもすぐに慣れそうな感じですし……」
「で、でも痛いなら、やっぱりやめといた方が……」
男としてこれでは蛇の生殺し状態になってしまうが、祥吾の性格ではどうしても相手の身体に対する心配が優先してしまう。
するとこちらをずっと見上げていた清香がふいに視線を横に逸らし、握った右手で口元を隠しながら小さな声で呟き出した。
「……た、確かにちょっと痛かったですけど……そ、それよりも、ずっとその……き、気持ちよかったです」
「……ふえっ？」
処女喪失はひたすら痛いものだと思い込んでいた少年は、全く想定外のその言葉に声が裏返ってしまった。
（そ、そういえば……ミー姉ちゃんも、痛そうだったのは最初だけで……後はあんまり痛がらなかったな……）

パイパンに続き、ロストバージンに対する体質まで一緒で、思わずポカンとしてしまう。
「もう！　私のこと、とんでもなくエッチな女の子だって呆れてますね！」
自分は違う点で言葉を失っていたのだが、清香が真っ赤な顔で抗議してくる。
しかもそれはいつもの凛とした怒り方ではなく、恥ずかしさをごまかすためのもの。
（な、なんだか……いつもとギャップがあるっていうか……）
素の感情を露わにしている清香が、たまらなく可愛く見えて――ビギン！
彼女が心配で僅かに萎えかけていた男根が、瞬時に硬度を回復する。
「はぁうン♥　も、もぉ～。わ、私が怒ってるのにぃ……な、なんでそれで……」
清香が先ほどまでと違った意味で顔を赤らめ、怒っているのか、喜んでいるのか、よくわからない顔になる。
（もー！　なんなのこの可愛さは！）
幼馴染みとして十年以上の付き合いだが、今日清香が自分に見せてくれる表情は、今までの彼女にはなかったものばかりだ。
「そんなのサヤちゃんが可愛すぎて、僕がメチャクチャ興奮しちゃってるからに決まってるでしょ！」
そう叫ぶなり、腰の動きを再開させる。
それでもいきなり激しく突き入れるようなことはせず、相手の様子を窺いながら慎重に

ペニスを送り込んでいく。
（うわああぁ。アソコの中はあいかわらず狭いけど、さっきみたいにキツすぎなくって、めちゃくちゃ気持ちいい～）
奥までたっぷりと蜜液に満ちていて、男根を一往復させるだけで背筋がゾクゾクと震えるような肉悦が迸る。
「そ、そんな恥ずかしいことばかり言って――ンはあぁン♥」
あまり痛くないというのは本当のようで、向かいあっている彼女の美貌に、苦痛を耐えているような様子は微塵もない。
それに安心した祥吾の動きから、だんだん遠慮がなくなっていく。
「凄いよサヤちゃんの中。僕のオチンチンに内側から吸いついてくるみたいで、こんなの気持ちよすぎて腰の動きが止まんなくなっちゃうよ」
根本まで埋め込んだ肉棒で、蜜壺を内側から掻き回し、
――グチュん♥　ヌチュくちゅ♥　ズンくちゅヌちゅン♥
と粘着質で卑猥な音をたて始める。
「シ、ショウちゃん、ああン♥　さっきから急に、エ、エッチになりすぎですぅ♥」
そんなことを言ってくる本人が、処女を喪失したばかりだというのに、こちらの動きに合わせて可愛らしく喘ぎ続けていた。

（おっぱいもこんなにエロく、タップンタップン揺れてるし！）
横になっても形を崩さない美巨乳が、祥吾の腰を突くタイミングに合わせて鎖骨の方に大きく弾み、腰を引くのに合わせて戻ってくる。とても柔らかいクセに、弾力にも富んでいるため、その揺れる動きにキレがあり、牡の欲情を原始的なレベルで掻き立てされる。
そのため目の前で揺れる桜色の突起が、自分を誘っているように見えてしょうがない。
「だ、だめぇ。そ、そんなにおっぱいだけジッと見ないでくださ――っはあぁン！」
彼女の抗議を皆まで聞く前に、乳首に思いっきりむしゃぶりついていた。
（うっわ⁉　すっごいガッチガチになってるうぅ！）
たっぷりと厚みのある乳肉に比べ、乳首のサイズはとても小さいのに存在感が半端ではない。柔らかな乳肌に唇を強く押しつけながら、舌をがむしゃらに絡みつかせてしまう。
「あああン！　そ、そんな――あぁぁん！　お、おっぱいダメですううぅ！」
どうやらココも彼女のウィークポイントのようだ。
あのお淑やかな幼馴染みが、恥じらいを忘れてあからさまな喘ぎ声を上げ始めた。
（身体の方もめちゃくちゃ痙攣してきたよ！）
祥吾を受け入れている蜜壺が、乳首を舌先で弾き舐めると同時にキュンと窄まる。
それに伴い膣襞たちが竿肌に深く食い込んできて、全身からブワッと官能の汗が滲み出すような肉悦が炸裂する。

祥吾は「ぷふぁ」と乳首から口を離すと、視線を再び幼馴染みの顔に向けた。
「あぁあぁン♥　ショウちゃん、凄いですぅ……ッッッ⁉」
すると、それまで恍惚とした表情をして可愛らしく喘いでいた清香が、こちらの視線に気づくなりその美貌をハッとさせ、慌てて下唇を噛んできた。
（うわわっ⁉　や、やっぱり恥ずかしいんだ！）
初体験に対する女体の反応がそっくりな姉妹だが、恥じらうポイントもよく似ている。
騎乗位でセックスをした澪も、気持ちよすぎて自らの腰が止まらなくなり、あられもなく喘ぐ姿を見られることが、とても恥ずかしそうだった。
清香もこちらの視線に気づくなり、あからさまに喘ぎ声を我慢している。
「どうしたの？　なんで口を閉じちゃったの？」
自分の反応も澪の時と同じだ。意識して合わせているつもりはないのに、こんな可愛いリアクションを見せられてしまうと、どうしても少し意地悪をしたくなってしまう。
「ッッ……そ、それは――はあぁン♥」
対して生真面目に答えようとした清香は、下唇を噛んでいた口の力を緩めてしまったために、思わず喘ぎ声を上げてしまう。
そんな自分に驚いたのか、清香は顔を真っ赤にして再び下唇を噛み締めた。
（か、かかかかかわいいいいいッ♥）

そのウブさや意外なドジっぷりがたまらない。祥吾は至近距離からジッと相手の顔を見詰めながら、あえて力を込めて腰を突き入れ始める。

「ンッ♥　んんッ♥　クッ――んんん♥」

己の肉先が女体の最深部に当たるたびに、清香の眉間に悩ましげな皺が寄り、しっかりと閉じられた口内から、愉悦のくぐもりが漏れてくる。

それでもなお感じている顔を見られるのが恥ずかしいのか、清香が顔を横に向けて、こちらの視界に片手を広げてきた。

横目で見詰めてくる濡れた瞳が『見ちゃダメ』と訴えかけてくる。

しかし興奮状態に陥っている少年には、その全てが逆効果だった。

恥じらわれれば恥じらわれるほど、もっと責めたてたくなってしまい――左手でその手首を掴んでベッドに押しつけ、右手で彼女の顎を掴み、強引にこちらに顔を向けさせる。

「今のサヤちゃん、可愛すぎ！　可愛くってエロくって、たまんない！」

そう叫び、相手は下唇を噛んでいるにもかかわらず、そのまま彼女の口にむしゃぶりついていた。

「んーーーー!?」

そんなこちらの興奮しきった行動に驚いたのか、清香が両目を丸くする。

（わわわっ!?　唇を舐めるのも、プニッとしてて気持ちいい！）

祥吾の方も予想していなかった唇自体の快感に夢中になり、鼻息荒く彼女の口元を舐めまくる。
「っぷふぁ！　シ、ショウちゃん、そ、そんな――あああああああぁぁぁ！」
あまりに熱烈なそのキスに、清香がとうとう口を開いてこちらに何かを言いかける。
が、そのタイミングを見計らい、祥吾は全力で清香を突きまくり始めた。
「あぁあぁぁン！　らめえぇぇぇぇぇ！　私のエッチな声、聞いちゃらめえぇぇぇ！　ショウちゃんのいじわるううぅぅぅ！」
清香は口を閉じられなくなってしまい、ずっと隠そうとしていた喘ぎ声を盛大に晒すことになってしまう。
ヤマトナデシコらしい恥じらいと、自らの敏感すぎる女体がもたらす快感が、その美貌の中で交錯し、同い年の女の子とは思えない、悩ましくも艶っぽい表情で喘ぎまくる。
「サヤちゃん、恥ずかしいの！　そんなにエッチな声を聞かれるのが恥ずかしいの！」
「んはあぁあぁぁぁ！　そんなこと聞くの意地悪ですううぅぅぅ！」
「ごめん！　でも今のサヤちゃんがエロ可愛すぎて、どうしても意地悪したくなっちゃうんだよおぉぉ！」
「ああン！　いやああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁン！」
「それじゃあ、僕が声が出ないようにしてあげる！」

祥吾はそう叫ぶなり、再び彼女の口にむしゃぶりついて、すぐさま舌を躍り込ませた。
――レロくちゅンチュン！　レロペロくちゅヌチュン！
そうして再び出会った二枚の舌は、すぐに動きを合わせて絡みあう。
（あんなに恥じらってたクセに、ベロチューには積極的なんだからあぁぁぁ！）
清香のリアクションの全てが凄まじい興奮へと直結し、爆発的なスピードで官能が最高レベルまで到達してしまう。
ただでさえヌルヌルでトロトロな膣襞たちと、猛烈な勢いで混じりあい、全身の細胞が沸騰しそうなほどの肉悦が炸裂する。
「っぷふぁ！　あぁぁ！　もうダメ！　イキそう！　もうイッちゃいそう！」
たまらず祥吾が叫ぶと、清香も顎を反らせるようにして絶叫した。
「わ、私も！　ああっ！　さっきから頭の中が何度も真っ白になって！　こんなの初めてッ！　あああぁぁぁ！　気持ちよすぎて自分が自分じゃないみたいですうぅぅ！」
今は恥じらいよりも、未知の快感に対する脅えの方が強いのか。
先ほど必死に抑えようとしていた喘ぎ声を盛大に叫びながら、祥吾にしがみついてくる。
「僕もだよおぉぉ！　気持ちよすぎて、もう身体を止められないよおぉぉぉ！」
「あぁぁ！　ショウちゃん！　ショウちゃぁぁぁん！　初めてですうぅぅ！　こんなに気持ちいいの初めてですうぅぅぅ！」

清香の絶叫を聞きながら、祥吾はラストスパートに入っていた。両手で彼女の両肩をがっちり掴み、互いの骨盤が震えるほどの勢いで腰を突きまくっている。

処女喪失直後から、竿肌に吸いついてくるようだった膣襞たちは、今では蜜路自体が奥へと捲り返るように蠕動し、絶頂直前のペニスにトドメの愉悦をもたらしている。

「イクッ！　イクよ！　ああッッ、一緒に！　サヤちゃんも一緒にッ！　ああぁッ！　サヤちゃん！　サヤちゃあぁぁぁぁぁん！」

祥吾は一際激しく彼女を貫き、一番深くまで腰を突き入れて動きを止めた。

細い尿道を内側からぶち抜くように、灼熱の激流が一気に駆け抜けていく。

――どりゅン！　ドぷどりゅッドプン！　どりゅドプン！

己の肉先を深く食い込ませた子宮孔へと、思うさま射精する最高の快感に、意識の全てが白く染め抜かれる。

「あぁぁぁ！　すごいですうぅぅ！　ショウちゃんが私の中で爆発して――ンはあぁぁぁぁぁぁ！　あぁぁ！　気持ちよすぎて――ああ！　イク！　私もどこかにイッてしまいますうぅぅぅ！」

祥吾にしっかりとしがみついていた清香が、そう絶叫すると同時に顎を限界まで仰け反らせ――ぷしゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！

勢いよく潮を吹き出した。

「ショウちゃんは、私のカレシですよね？」
「えっ⁉　あ、ああの、うん」
先ほど彼女が澪に言っていた通り、こちらから付きあってください、と告白をして、そして彼女がそれを受けたのだから『カレシ・カノジョ』の関係なのは間違いない。
「なら、ショウちゃんは私のモノですよね？」
すると彼女は大きな瞳をうっとりと細め、その清楚な美貌に似つかわしくない、やけに艶めかしい顔してこちらの股間に手を伸ばしてくる。
「わわわっ⁉　ちょっと、サヤちゃん！　ミー姉ちゃんがいるのに、何、考えてるの！」
さらに激しく首をブンブンと横に振ったが、いきなり跪いた相手にズボンのファスナーを下ろされて、そのまま勃起の収まっていないペニスを取り出されてしまう。
正反対な性格をしている姉妹なのに、なぜこんな部分では妙に言動が一致するのだろう。
「ん？　なんでこんなに下着が濡れて……って、えっ？　アレ？　……なんだか……ヌルってしてますよ？」
もうダメだ。決定的な証拠に気づかれてしまい、自分の性格ではこれ以上、シラを切り通すことなど不可能だった。
「ご、ごめん！　じ、実はさっき――」
そうして澪にメールで呼び出され、いきなり男根を咥えられたことまでを、しどろもど

ろに告白する。
「で、でもイッてはいないから！　本当にちょっと舐められただけだから！」
「そのちょっとが許せないんです！　こ、こうなったら私もッッ！」
「えっ⁉　サヤちゃん、何を――っはあぁうぅ⁉」
いまだ澪の唾液が乾ききっていないペニスに、その妹がしゃぶりついてきた。
包皮が剥けて色の変わっている境目辺りを唇でキュッと絞りつつ、先端の小穴を中心にレロレロと舐めてくる。まるで尿道の中に恋敵の情念が残っていて、それを舌で全て掻き出さんとしているような激しさだった。
いつもは優しさと品のよさを漂わせている大きな瞳にも、今は熱烈な恋情とそれ故の嫉妬を入り混じらせている。
「っふあぁぁ！　ダ、ダメだよぉ！　そんなところ、いきなり激しく舐めちゃあぁぁ！」
本来、尿道の中にまで舌が入ってくることはない。
しかしこれほどの勢いで舐められると、フッとした拍子に舌先が縦に割れた小穴の内側に僅かに届くことがある。
そのたびに頭髪が全て逆立ちそうな鋭い快感が炸裂し、身体がビクビクと震えてしまう。
精神的にこれ以上ないほど追い詰められているにもかかわらず――否、それほど追い詰められているために、男根の感度がいつも以上に敏感な気がする。

「レロんちゅン♥　ろうれすか？　お姉ちゃんなんかより、私のお口の方がずっとずっと、気持ちいいですよね――レロんちゅんン♥」
「らめえええぇ！　そんな風に先っちょばっかり舐めまわしちゃらめえええぇ！」
祥吾は思わず両手で頭を抱え、大声で喘ぎまくってしまう。
「もう！　さっきからヘンな声出して何やってんのよ！　まさか本当にこんなところでまた浮気してるわけないでしょう――なっ!?」
自分の喘ぎ声を聞きつけた澪が、当然のようにやってきた。
彼女もまさか――自分のしたことは棚に上げて――これほどあからさまに堂々と、己がいる家の中でこんなことが行われているとは思っていなかったのだろう。
実の妹にペニスの先をむしゃぶり回されている祥吾の姿に、心底びっくりした顔をして、そのまま絶句して固まってしまう。
そんな中――くちゅ、ズルっ、むちゅン！　くちゅヌルくちゅン！
男根を咥えている清香の口腔奉仕は止まらない。むしろ姉に見せつけ、その音を聞かせるような激しさで、咥えたペニスをむしゃぶり続けている。
「そんな唇まで使って、オチンチン全体を扱いちゃらめえぇ！」
澪に――二股相手に見られている、という究極の状況がさらに牡の感度をはね上げさせ、清香の唇が竿肌を滑っていくたびに、甲高い喘ぎ声を上げてしまう。

「どうですお姉ちゃん♥　これでショウちゃんが誰のカレシか、はっきり自覚できたんじゃないですか？」

己の奉仕で激しく喘ぐ祥吾をたっぷりと見せつけた後、清香が姉に対して改めて勝利宣言をする。

「……ハッ⁉　さ、さやかあぁぁあぁぁぁぁ！」

我に返った澪がそう叫ぶなり、凄まじい勢いでこちらに詰め寄ってきた。そして妹の肩に己の肩をぶつけるようにして跪く。

祥吾から見て右に清香、左に澪、という位置になり、壁を背中にしているためにますます逃げ出せない状況になってしまう。

「何勝手にアタシの祥吾をしゃぶってるのよ！　祥吾にご奉仕していいのは、恋人のアタシだけよ！」

「何を言ってるんですか！　ショウちゃんが一番気持ちいいのは私なんです！　お姉ちゃんが視界に入ると、ショウちゃんのオチンチンが萎えますから近づかないでください！」

「な、ななな萎えるですってー！」

口論の合間もずっと男根を舐め続けている妹に対し、姉は両目を怒りで吊り上げると、いきなり大きく口を開けて、凄まじい勢いでペニスに向かってきた。

怒りのあまりアソコを噛み千切る気じゃないか。

そんな心配がフッと脳裏を過るほどの勢いだったが――レロむちゅレロぉぉぉン！
澪までもが大きく舌を出し、妹の涎まみれになっているペニスをむしゃぶり出す。
「っふあぁぁぁ!?」
男根にもたらされる快感がいきなり倍となり、思わず裏返った声を漏らしてしまう。
「ち、ちょっとお姉ちゃん！　何、考えてるんですか！　今、私がショウちゃんを喜ばせていたんですよ！　横取りしないでください！」
まさかこの場で即、フェラで対抗してくるとは清香も思っていなかったのだろう。
激しく舌と唇を躍らせている姉の姿に、彼女も驚きで目を丸くしている。
「何言ってんのよ！　横取りしたのはアンタの方でしょ！」
「違います！　お姉ちゃんです！　それも今だけじゃありません！　ショウちゃんはずっとずっと私のことが好きだったんです！」
「違うわよ！　そもそも祥吾の初恋相手はアタシなんだからね！　初フェラだって、初体験だって全部アタシなんだから！」
「そんなの無理矢理しただけじゃないですか！」
「だいたい、アンタみたいな真面目が祥吾を満足させられるわけないでしょ！　祥吾はアタシのお口の方が気持ちいいんだらね！」
「そんなことありません！　お姉ちゃんみたいな自分勝手な人が、ショウちゃんを私以上

に喜ばせられるわけありません！」
美人姉妹は勃起ペニスを挟んで睨みあい、互いの瞳に大きな炎を燃え上がらせる。
「こうなったら勝負です！　どちらがショウちゃんを気持ちよくできるか！」
「随分と生意気言うようになったわね！　いいわよ！　女としての格の違いを嫌ってほど見せつけてあげる！」
彼女たちはそれだけ言うと、二人の間でヒクンヒクンとずっと上を向いていた男根に再びむしゃぶりついてきた。
「ふあぁあぁぁ⁉　二人一緒だなんて、こんなのすぐにイッちゃうよぉぉ！」
ペニスの左右に押しつけられた二枚の舌が、もの凄い勢いで根本から先端までをペロンペロンと舐めていく。
「ダメですよ、ショウちゃん！　すぐにイッたら！」
「我慢なさい！　アタシが清香に圧倒的な差を見せつけるまではね！」
そんなことを叫びつつ何度も唇を押しつけては、肉胴部分を執拗にねぶっていく。
そのたびに股間から迸ってくる大量の肉悦が、祥吾の全身を細胞レベルで隈なく駆け巡る。何しろ一人が相手でも即暴発してしまいそうなほど気持ちいいのに、二人になったことでペニスにもたらされる快感量は単純に二倍だ。
（あぁぁ！　本当に二人が一緒に舐めてる！　ミー姉ちゃんとサヤちゃんが僕相手にダブ

ルフェラをしてくれているううぅ！）

この世の男のほとんどが一生経験できないであろうその贅沢すぎる極上奉仕を、学園で一、二位を争う美少女姉妹に同時にされているのだ。

その精神的なインパクトは倍では済まない。

「ココれすよね♥　レロんちゅ、レロれろぉぉぉン♥　ショウちゃんの弱いところ♥」

あの清楚な清香が大胆に舌を出し、上目使いでこちらの反応を窺いながら、竿肌に盛り上がっている血管をなぞるように舐めてくれている。

「チュッチュッチュッ♥　祥吾って、こーいうのも好きだよね♥　ンチュくちゅんんん♥」

ファンクラブまである年上の初恋相手が自ら唇を窄ませて、ペニスの側面に小刻みにキスをしては、唇を使い大胆にそこをねぶり上げてくれる。

「こんなことされて、すぐにイッちゃダメなんて、そんなの無理だよぉぉぉッ！」

己のペニスを気持ちよくするためだけに熱心に這い回る、二組の舌と唇の動きが少年の脳味噌を快感と興奮で沸騰させていく。しかも――。

（な、なんだか、だんだん二人の舐め方が似てきてるッ！　っていうかタイミングが合ってきてるッ！）

ペニスを挟んで、左右の二人が鏡に映したように舌と唇を駆使している。

最初はこれも姉妹だからか、と思ったが、理由がそうでないことにすぐに気づく。

「ンちゅんん♥　ショウちゃん、私に舐められるのが気持ちいいんですよね♥」
「祥吾ぉ♥　こんな風に舐められる方がずっと感じるんでしょぉ♥　レロぉぉぉぉン♥」
と二人は本気で反目しあいながらも、やはり本気で『ペニスを気持ちよくさせる』という勝負をしている――この現象はそのためだ。
ダブルフェラを始めた当初は、ペニスの左右を互いが好きなように責めていた。
しかしそうすると逆側から別々に舌や唇を押しつけるため、互いの力が逃げたり男根に余分な負担がかかることがある。痛みを感じるほどではなかったが、そのたびにペニスにもたらされる快感量はどうしても落ちた。
いくら自分が「気持ちよすぎる」と叫んでも――事実、一人だけのフェラに比べれば充分に気持ちよすぎるのだが――祥吾の喘ぎ声の変化や身体のビクつき具合から、勘のいい二人はそれを敏感に察したのだろう。
こちらがお願いしたわけでもなく、ましてや二人で言い交わしたわけでもなく、純粋に祥吾の快感を追求した結果、自然に左右の動きがリンクしていた。
今も二人はペニスを左右から咥え、まるでハーモニカでも吹くように首を同時に横に滑らせている。そのため押しつけられる唇の柔らかさも、舐める舌のしなやかさも、全てを快感としてペニスで受け止めることができていた。
「もう。お姉ちゃん、私の真似ばっかりしないでください」

「アンタこそ。ンチュんんん♥　さっきからなんなのよ」
と言葉では争っているものの、その動きが完全に一致しているため、ポニーテールの黒髪と、軽くウェーブのかかった茶髪が、まるでペアダンスでも踊っているかのように揺らめいている。
男根にもたらされる贅沢すぎる肉悦と、そんな網膜から直接脳味噌を揺さぶってくるような淫らな光景が、祥吾を瞬く間に限界まで追い詰める。
「あああぁぁぁぁぁ！　もうイク！　本当にもう限界だよおぉぉ！」
全身から愉悦の汗がブワッと吹き出し、全身の血流が肉棒に集中していくこの感覚。
腰の奥の官能の昂りが、もう引き返せないレベルにまで達している。
散々『すぐにイッちゃう』と叫んできたが、今度こそ本当にもうこれ以上は耐えられないと、二人も肉棒の硬度で察したのだろう。
今までのように「まだダメ」「我慢して」などと無理なことは言ってこなかった。
ペニス全面をねぶり尽くしていた二組の唇が、ピッタリと息の合った動きでヌルーっと先端に移動して――レロれろッくちゅン！　レロレロレロッ！
しなやかな桃色の牝舌たちが再び最も敏感な先端の小穴を舐めだして、爆発直前の男根にトドメの快感を轟かせる。
「ンンン♥　いいょぉ♥　このままアタシの舌だけでおもいっきりイッちゃってぇ♥」

「イッてください♥　私のペロペロだけでッ、最高に気持ちよくなってください♥」

二人はさらにライバル心を燃やしながら、一心に舌を躍らせてこちらをジッと並んで見上げてくる。その光景はまるで、親鳥にエサをねだる雛のように健気で一生懸命で、見下ろす少年に男として、たまらない優越感をもたらしてくれる。

しかも二枚の舌は共に先端の小穴を舐めているため、必然的に何度も絡みあっていた。

（うわあぁぁあぁぁ！　こんなのッ！　こんなのまるでッ！）

この美少女姉妹がディープキスをしていて、その重なっている舌の間に自分がペニスを割り込ませているようにも見える。

「イクからねえぇぇ！　二人のッッ！　サヤちゃんとミー姉ちゃんがエロエロに絡みあわせているこの舌で、おもいっきりイッちゃうからねえぇぇぇ！」

祥吾はそう絶叫すると同時に、全身に渦巻いていた官能の昂りを爆発させた。

二人に激しく舐め尽くされて極限まで剛直したペニスの中を、灼熱の粘液が凄まじい勢いで一気に駆け抜けていく。

――ドプッどりゅンッ！

一弾目が肉先から飛び出すと同時に、激しく絡みあっている二枚の桃色舌に直撃。

ドプァッと粘っこく周りに飛び散り、舌だけでなく二人の美貌までも同時に汚す。

そして――ドプドプどぷン！　どりゅドギュどぷン！

その後に続く牡の脈動が、さらに二枚の舌で弾け、飛び散る粘液が二人の美貌の上に白濁の層を乗せていく。
「いいよぉ♥　もっとかけてぇ♥　祥吾の白いのアタシのお顔に全部ぶっかけてぇ♥」
「遠慮せずに私のお顔にだけかけてください♥　ショウちゃんの全部受け止めますぅ♥」
己の吐き出す精液を、二人の美少女が競ってその舌や顔で受け止めてくれる光景が、牡の脈動をさらに長引かせる。
「っふぁぁ……ッ……っくふぁぁ～」
そうして祥吾は心行くまでダブル顔射を堪能し、盛大な射精を終えると、息ませていた全身から力が抜けて、背中の壁に寄りかかった。
そのままうっとりと目を閉じてハアハアと肩を上下させ、ある程度、呼吸が整ってから、閉じていた瞼をゆっくり開く。
「……あ、あれ？」
すると先ほどまで自分の前に跪いていた美少女姉妹が、顔の汚れを綺麗にして目の前に並んで立っていた。
先ほどまでの恍惚とした顔ではなく、やけに真剣な表情をして。
「……で？」
澪の方が僅かにその細い顎を引くようにして、こちらになんらかの返答を求めてくる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!